岩野泡鳴 著

耽溺

耽溺

岩野泡鳴

明治四十三年四月廿六日印刷
明治四十三年五月一日發行

耽溺奥付
定價金八拾五錢

著者　岩野泡鳴

發行者　東京市麹町區飯田町六丁目二十四番地
森脇美樹

印刷者　東京市京橋區宗十郎町十五番地
中島丑之助

不許複製

發行所　東京市麹町區飯田町六丁目
（振替口座一二〇三四番）
易風社

序に代ふ

花袋君よ、君に僕の最初の小說集『耽溺』を獻じたい。

そのついでに、少し僕の心持ちを云つて見たいのだ。君は、センチメンタルな紀行文、その他の作者としては、つとに廣く知られてゐたが、小說作者として群を拔いたのは近頃のことだ。君は硯友社一流の娛樂文學や赤門派並に早稻田派の形式的文藝論やの跋扈を長らく忍んで來た。その間の消息は丁度僕が新體詩に於て認められるまでの消息と殆ど同じであつたらう。僕を以つて君を推せば、君も亦隱れた苦悶、慨歎、不平等を經て來たに相違ない。然しそれだけ君は現代小說界の最初の具眼者であつたのだ。

君によつて新傾向に就いたものは、故獨步氏もさうだらう。藤村氏もさうだらう。僕もその一人たるを否まないのである。君は年齡に於て僕の長たると同時に、新らしい學識に於て僕の兄である。君の『露骨なる描寫』(太陽掲載)は、僕の『神秘的半獸主義』(單行)に先立つこと二三年、この間に僕は君を知つた。して、『半獸主義』は僕に取つてその由來甚だ遠しとは云へ、その新文藝に關する所說に至つては、君と相知つてから初めて抱合された點が少くない。して、この論著が進んでまた『新自然主義』(單行)となつたのだ。

不幸にして君と僕とは文藝の實行的性質に就て意見を同じくすることが出來ないが、君としても、主觀の力を全没して昔の淺薄な没理想論の程度にとどまるつもりではなからうし、また如何に傍觀的態度を主張しても、實行に添ふその人としての眞摯が文藝創作の上にもあるのを拒まぬだけは僕と違はないだらう。して、君の所謂傍觀的若しくは客觀的態度なるものを忠實に追行しようとすることも、亦、主觀が僕の所謂文藝家即人間としての努力をするのではないか？この疑問に然りと答へるなら、僕の文藝實行論になる。僕は、乃ち、新文藝家が全人的文藝をやるのは、人間その物としての努力であると云ふのだから、別に文藝家といふ人格が人間といふものの部分的一區別として存在するを許さない。つまり、文藝家が文藝を行ふ場合に於ては、それに全心全力を注くべきものであつて、他種の人格を豫想すべきものではないと云ふのだ。それで僕は戰爭に打ち死にする軍人の實行と文藝の創作とは同一の態度だと說くのだ。秋江氏は僕の心熱の說の如きは既に既にヲルタアペイタアが『ルネサンス』で說いてゐると云つたが、心熱全人的を刹那主義まで突ッ込んであるのは僕一個の見解であるのに氣が付いてゐない所以だ。して、それが分れば、人生觀も哲學的考察もすべてこの文藝論と同一に氷解される。問題は簡單明了であるのだが、區別的文藝の覇絆を脫し切れない緒

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

家には受け取れないかして、文藝實行とは文藝の上に現はれた表面的事實を實行することだと誤解されてゐる。淺慮も亦甚しいではないか？　そんな淺薄な考へを持つてゐるから、餘裕文學や遊戯文學の不眞面目な分子が這入つて來る。現代の戯作者を以つて滿足するものなら知らず、僕等は少しでも戯作者的態度の見えるのを心よしとしないのだ。拍月氏の議論では、この不眞面目を許してゐるのだが、君のは氏のによりも僕のに近いと僕は信じてゐる。

僕は以上の考へで『悲戀悲歌』以後の詩を作つたが、自然主義的表象劇『焔の舌』（三十九年、新小說掲載）も亦この考へを體現する最初の長篇と云つてもいい。惜しいことには、發禁止の恐れがあるので、ここに編入することが出來ない。それから、『日の出前』、『戰話』、『老婆』、『榮吉』を經て、『耽溺』に至り、計らずも君の『蒲團』と等しい第二の戯を取り扱つたことになり、君も僕の小說に於ける態度を認めて呉れたが、『篠原先生』を君はどう見るか、僕はそれを知りたいのだ。短篇ながら、『耽溺』だけのことは書けてゐると思ふ。

鬼に角、小說が今日拵らへ物でなくなつた以上、僕等は筆を執ると同じ心持ちで筆を執つてゐたい。飯を喰ふと同じ態度で作をしたい。うまい時もあらう、まづい時もあらう。然し誇張や手段の爲めに平常の態度を狂はせたくない。作さへ——無論、眞摯な作さへ——してゐ

れば自己の生命はあるのだ。

僕は今樺太行きの途中にある。出發前、種々心を混亂する事情のあつた爲め、編入小說の一たび掲載された諸雜誌記者へ編入許可を依賴する手續きを忘れたが、それは事後承諾を乞へばよからうと思ふ。校正も自分でしたかつたのだが、止むを得ず、他の人に依賴した。

北海道は氣候が東京とは大分違ふ。樺太はなほ更ちだらう。僕は不斷好まないシャツを着て行くつもりだ。

君よ、遠者にお給へ。僕は秋になつたら歸京する。

明治四十二年六月廿三日

小樽にて船出を待ちながら

泡鳴　拜

目錄

耽溺……一
篠原先生……一九六
老婆……二二九
日の出前……二五七
戰話……二九五
結婚……三三〇
榮吉……三五〇

（一）

僕は一夏を國府津の海岸に送ることになつた。友人の紹介で、或寺の一室を借りるつもりであつたのだが、たづねて行つて見ると、いろいろ取り込みのことがあつて、この夏は客の世話が出來ないと云ふのでまたその住持の紹介を得て、素人の家に置いて貰ふことになつた。少し込み入つた脚本を書きたいので、やかましい宿屋などを避けたのである。隣りが料理屋で、藝者も一人かかへてあるので、時々客などがあがつてゐる時は、隨分さうぐしかつた。然し僕は三味線の浮き浮きした音色を嫌ひでないから、却つて面白いところだと氣に入たのだ。

僕の占領した室は二階で、二階はこの一室よりほかなかつた。隣りの料理屋の地面から、丈の高いいちじくが繁り立つて、僕の二階の家根を上までも越してゐる。いちじくの青い廣葉はもろさうな物だが、之を見てゐると、何となくしんみりと、氣持ちのいゝ物だから、僕は芭蕉葉や青桐の葉と同樣に好きなやつだ。而もそれが僕の仕事をする座敷から直ぐそばに見えるのだ。

それに、その葉かげから、隣りの料理屋の奇麗な庭が見える。燈籠やら、いくつにも分岐した敷石の道やら、瓢簞なりの池やら、低い松や柳の枝ぶりを造つて刈り込んであるのやら、例の箱庭式はこせついて厭な物だが、掃除のよく行き屆いてゐたのは、これも氣持のいい物だ。その庭の片端の、僕の方に寄てるところは勝手口のあるので、他

の方から低い竹垣を以つて仕切られてゐて、そこにある井戸――それも僕の座敷から見える――は、僕の家の人々もつかはせて貰ふことになつてゐる。

隣りの家族と云つては、主人夫婦に小供が二人、それに主人の姉と藝者とが加はつてゐた、主人夫婦は極お人よしで家業大事とばかり、家の掃除と料理との爲めに、朝から晩まで一生懸命に働いてゐた。主人の姉――名はお貞――と云ふのが、昔からのえら物で、そこの女將たる實權を握つてゐて、地方有志の宴會にでも出ると、井筒屋の女將お貞婆さんと云へば、なか〳〵幅が利く代り、家にゐては、主人夫婦を呼び棄てにして、少しでもその意地の悪い心に落ちないことがあると、意張りたがるお客が家の者にがなりつく樣な權幕であつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

お君といふその姪、乃ち、その娘も、年は十六だが、叔母に似た性質で、――客の前へ出ては内氣で、無愛嬌だが、――とんまな兩親のしてゐることがもどかしくつて、もどかしくつてたまらないと云ふ風に、自分が用のない時は、火鉢の前に坐わつて、目を離さず、その長い頤で兩親を使ひまはしてゐる。前年など、かかへられてゐた藝者がこの娘の皮肉の折檻に堪へ切れないで、海へ身を投げて死んだ。それから、急に不評判になつて、あの婆さんと娘とがゐる間は、井筒屋へは行つてやらないと云ふ人々が多くなつたのださうだ。道理で餘り景氣のいい料理店ではなかつた。

僕が英語が出來るといふので、僕の家の人を介して、井筒屋の主人がその小供に英語を敎へてくれろと賴んで來た。それも眞面目な依賴

ではなく、時々西洋人が來て、應對に困ることがあるので、『おあがんなさい』とか、『何を出しましよう』とか、『お酒をお飲みですか、ビールをお飲みですか』とか、『藝者を呼びましようか』とか、『大相上氣嫌です、ね』とか、『またいらつしやい』とか、さういふことを專門に敎へてくれろと云ふのであつた。僕は好ましくなかつたが、仕事のあひまに敎へてやるのも面白いと思つて、會話の目錄を作らして、そのうちを少しづつと、二人がほかで習つて來るナショナル讀本の一と二とを讀まして見ることにした。お君さんとその弟の正ちやんとが毎日午後時間を定めて習ひに來た。正ちやんは十二歲で、病身だけに、少し薄のろの方であつた。

或日、正ちやんは、學校のないので、午前十一時頃にやつて來た。

僕は大切な時間を取られるのが惜しかつたので、いい加減に教へてすましてしまうと、

『うちの藝者も先生に教へていただきたいと云ひます』と云ひ出した。

『面倒くさいから、厭だよ』と僕は答へたが、跡から思ふと、その時から既にその藝者は僕をだまさうとしてゐたのだ。正ちやんは無邪氣なもので、

『どうせ習らつても、馬鹿だから、分るもんか？』

『なぜ？』

『こないだも大ざらひがあつて、義太夫を語つたら、熊谷の次郎直實といふのを熊谷の太郎と云うて笑はれたんだ。——あ、あれがうちの藝者です、寢坊の親玉。』

と、そとを指さしたので、僕もその方に向いた。いちじくの葉かげから見えたのは、しごき一つのだらしない寢巻き姿が、楊子を喰はへて、井戸端からこちらを見て、笑つてゐるのだ。

『正ちやん、いい物をあげようか？』

『ああ』と立ちあがつて、兩手を出した。

『ほうるよ』と、勢ひよくからだが曲がるかと思ふと、黑い物が飛んで來て、正ちやんの手をはづれて、僕の肩に當つた。

『おほ、ほ、ほ！御免下さい』と、向ふは笑ひくづれたが、直ぐ白いつばを吐いて、顏を洗ひ出した。飛んで來たのは僕のがま口だ。

『これはわたしのだ。さッき井戸端へ水を飲みに行つた時、落したんだらう。』

『あの狐に取られんで、まア、よかつた。』

『可愛さうに、そんなことを云つて――何といふ名か、ね？』

『吉彌と云ひます。』

『歸つたら、禮を云つといてお呉れ』と、僕は僕の讀みかけてゐるメレジコウスキの小説を開らいた。

正ちやんは、裏から來たので、裏から歸つて行つたが、それと一緒に何か話しをしながら、家に這入つて行く吉彌の素顏を鳥渡のぞいて見て、餘り色が黑いので、僕はいや氣がした。

（二）

僕はその夕がた、あたまの勞れを癒しに、井筒屋へ行つた。それも、

角の立たない樣に、わざと裏から行つた。

『あら、先生！』と、第一にお貞婆さんが見つけて立つて來た。『こんなむさ苦しいところからお出んでも――』

『なあに、僕は遠慮がないから――』

『まア、お這入りなさつて下さい。』

『失敬します』と、僕は臺どころの板敷きからあがつて、大きな圍爐裏のそばへ坐わつた。

主人は尻はしよりで庭を掃除してゐるのが見えた。おかみさんは下女同樣な風をして、廣い臺どころで働いてゐた。僕の坐わつたうしろの方に、廣い間が一つあつて、そこに大きな姿見が据ゑてある。お君さんがその前に立つて、頻りに姿を氣にしてゐた。疊一枚ほどに切れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo